我といふ人の心

――『伝記 伊藤整』を書き終えて――

曾根博義

晩年の谷崎潤一郎に『雪後庵夜話』という随筆集がある。創作以外の場所で自己を語ることのきわめて少なかった文豪が、七十も半ばを過ぎてから、四十年近くも前の松子夫人との出逢いその他を自ら「告白」した興味深い書物だが、その巻頭には、いかにもこの文豪にふさわしい歌一首が掲げられている。いわく、

我といふ人の心はたゞひとり
われより外に知る人はなし

かつて「思想のない作家」として文壇で不当に軽んじられていた谷崎潤一郎を高く評価し、その文学をわが国の文学史の正統に位置づけて今日の谷崎評価の礎石を築いたかの感のある伊藤整は、この一首を歌としても谷崎潤一郎という作家の自己表現としても完璧であるとして絶讃したことがある。昭和四十一年、谷崎の没後一年、伊藤整自身が、老年の性を描いた最晩年の傑作『変容』を雑誌に連載しはじめる直前のことである。おそらく伊藤整は、自己に対する執着の激しさという点で、「我といふ人の心は……」の内容に深く共感するところがあったのであろう。

しかしあくまで自己を恃みたい気持は同じでも、谷崎潤一郎と伊藤整とでは、その現われ方はおのずから異なった。自己告白を道あるいは芸とした私小説家たちと反対に、谷崎潤一郎は徹底して芸の背後に身を隠そうとした作家であった。『雪後庵夜話』はそのめずらしい例外だが、しかしこの一書とて、右のような歌で始まっている以上、たんなる「告白」の書として受けとめるわけにはゆかない。

谷崎潤一郎が芸の背後に身を隠した人であったとすれば、伊藤整はいわば身を隠すこと自体を芸とした人であった。人に規定される前に自己を分析し描きつくして一分の隙も見せないこと自体を芸としたかのような人であった。晩年、鍛え上げられたその自己透視力が、自己の死や死後のことにまで及んでいるのを見る時、読者は、一瞬、慄然とせざるを得ない。

このほど六興出版から上梓した『伝記 伊藤整〈詩人の肖像〉』に着手する前から、私は何よりもまず伊藤整のこの絶望的なまでに執拗な自愛の本能と自衛の術策に感嘆していた。けれども、いざ伝記を書くとなると、これほど厄介な相手はいない。私もまた執拗に伊藤整の歩いた跡を追いかけたが、しばしばその跡は先に歩いた人自らの手できれいに掃き浄められていて、途方に暮れなければならなかった。もっとも箒の跡から何らかの手がかりが見つけ出せることもないではなかったが。

伝記といっても、今度の本に伊藤整の全生涯は描かれていない。文壇登場以前の詩人時代、つまり伊藤整の青春を私なりに後付け得たところまでで筆を擱いている。それだけで四百字詰原稿用紙にして千枚を越えてしまった。何が何でも前半生だけで千枚以上とは長過ぎるといわれそうだが、長くなったのは、伊藤整という扱いにくい相手に対する、私の苦肉の策の然らしむるところでもあった。

周知のようにこの時代のことは伊藤整自身が数多くの「自伝的作品」に巨細洩らさず書いてしまっている。父昌整については長篇『年々の花』が委細を尽し、詩人時代については『若い詩人の肖像』に精細かつ客観的な記述があるといった具合に。伝記作者にとってこれは大変有難いことなのだが、同時に実に困ることでもあるのだ。調べ甲斐がないとか、本人の記憶ちがいがあるとかいったことならまだいい。この周到きわまりない自伝作家は、早くから、いかにも自伝らしく見える嘘の話を作り、しかもその筋を次の作品の筋につなげて一層自伝らしく見せかけるという、実に手の込んだ「偽装自伝」の方法を編み出したと自ら公言するほどの、アリバイ作りの名人なのだ。一筋や二筋の縄ではどうにもならない所以である。

こういった操作の裏には、おそらく、自分や自分の周囲の人びとを世間の目から守りたいという慎重な配慮とともに、ほんとうの自分は自分にしかわからないのだという固い信念があったと思われる。だが、自分にしかわからない自分とは何か。果たしてほんとうの自分は他人には窺い知れぬものなのか。そもそも、「我といふ人の心はたゞひとりわれより外に知る人はなし」ということが、一体どんな根拠からいえるのか。むしろ反対に、自分というものは、人にはわかっても自分自身には遂に捉え得ぬものではないのか。

そんな気がしていた私は、伊藤整が病に倒れて癌研に入院する前日、それまで世話になっていた医師に書き贈ったという一枚の色紙を見た瞬間、愕然とし、やはりそうだったのか、という思いに心を打たれた。それにはこう書いてあったからである。

我といふ人の心は誰ひとり
我自らも知るすべはなし　整

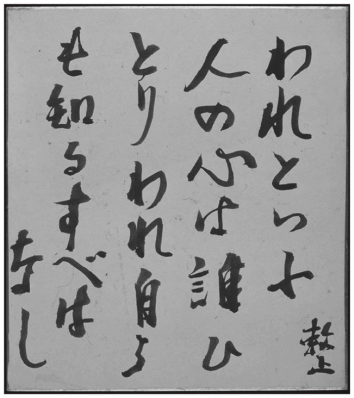
伊藤整が逝ったのはその一か月後であるから、辞世とみなして差し支えない歌であろう。

それ以来、私は少し楽な気持になって、伊藤整自身による伊藤整像と私の中に出来上がりつつあった伊藤整像との喰い違いが気にならなくなっただけでなく、うまくやればその隙間を利用してもっと実在感のある伊藤整像を描き出せるかもしれないと思うようになった。その隙間を、伊藤整自身の、あるいは私一個の伊藤整像で塗り潰すかわりに、整のまわりにいた大勢の人びとの記録や談話で充たして、そこに伊藤整という一人の人間を確実に存在させることができるのではないかと考えたのである。いわば周囲を克明に描いて中心を浮かび上がらせる方法である。

私の対抗戦術は以上のようなものであった。千枚以上の枚数を費やさなければならなかったのは、半ばその必然の結果である。ただこの方法が果たしてうまくいっているかどうか、その判定はもっぱら私の本を実際に読んで下さる方々一人一人の考えに委ねられている。

（『埼玉新聞』一九七七年一〇月二五日）

小樽市塩谷「ゴロダの丘」伊藤整文学碑前で。碑建立に尽力した伊藤整の旧友坂下丹治（左）澤田斉一（中央）と曾根博義（右）。1973 年『伝記 伊藤整』執筆のための北海道調査の折か。



伊藤整が亡くなる前、世話になった医師に贈った色紙。元歌は谷崎潤一郎詠「我といふ人の心はたゞひとりわれより外に知る人はなし」

小樽時代からの旧友田居尚（左）と伊藤整。「伊藤整日記」の記述より、1954 年 5 月 5 日吉祥寺で田居が経営する店内と推定される。

公式 Twitter で
最新情報発信中！

市立小樽文学館 JR 小樽駅より徒歩 10 分・駐車場あり
047-0031 小樽市色内 1-9-5 tel.fax.0134-32-2388